

こころ21だより

NPO法人 心豊かな家庭環境をつくる広島21

発行責任者／理事長 岸房康行

会報 第51号

2022年(令和4年)12月28日発行

事務局

〒730-0856

広島市中区河原町7-2 徒然社内

TEL 082-292-4507(金子)

FAX 082-292-4508

E-mail: kokoro21@tsure20.co.jp

こころ21

検索



本年もご支援よろしくお願ひ申し上げます

NPO法人 心豊かな家庭環境をつくる広島21 理事長 岸房 康行
副理事長・事務局長 金子 敏郎

2023年度に向けて

新型コロナウイルスの感染者が減少する気配が一向に感じられない現状では、ウイズコロナ、コロナとの共生を考える時期に来ているのではないのでしょうか。私たちはコロナ対策を徹底し、万全の用意をして11月にフォーラム、こども夢コンサートと二つのイベントを開催しました。

これからも状況を見ながらイベント展開を検討したいと考えています。

フォーラムの開催

平成18年以降食育、子育てといったテーマを中心に11回フォーラムを開催しています。ウイズコロナの時代に当NPO法人として何を、どのようにして訴えていくか、事務局としても議論を深めていきたいと思ひます。会員の皆さまもご意見をお寄せください。

これまで25回開催。令和5年度は4回開催をめぐりに大学と協議を始めます。

このプロジェクトの実施にあたっては、エネルギー文化・スポーツ財団、マツダ財団、広島信用金庫へ助成金、協賛金の申請をする予定です。

子どものための音楽プロジェクト開催

- ・こども夢コンサート(企画・協力 エリザベト音楽大学)
これまで35回開催。令和5年度は4回開催をめぐりに大学、広島市の窓口と協議を始めます。
- ・子ども音楽体験教室(企画・協力 広島文化学園大学)

カレーづくり大会の普及・啓発活動

6ページで紹介している「カレーづくり大会」事業。実行するのは難しい状況ですが、この事業の狙いを広く知らしめる方法を考えていきたいと思ひます。

「未来を担う子どもの育て方を考える」

今年1月に開催を予定していたフォーラムはコロナ禍のため中止しましたが、今回は参加者の事前登録、当日の入場時には非接触型体温計を準備するなどコロナ対策を徹底して開催しました。

未来を担う子どもたちのために私たちには何ができるか、家庭や地域はどう向き合えばよいのかを3時間にわたって考えました。

フォーラムの内容については会員の大石一朗さんと、講演者・パネリストの意見からの学びを司会の木時寿子さんに寄稿していただきました。

体験重視の子育てを 「子どもの育て方」フォーラムで論議

大石 一朗

地域や家庭の教育力の低下が心配される中、フォーラム「未来を担う子どもの育て方を考える」が11月12日、広島市まちづくり市民交流プラザで開かれ約80人が参加した。

最初に「持続可能な地域社会総合研究所」所長の藤山浩さんが基調講演。バブル経済や東京一極集中がもてはやされた時代を振り返り、自らの子育て体験に触れながら「競争・成長から共生・持続へのベクトル転換が必要」と訴えた。

パネルディスカッションでは、中国新聞特別編集委員の山城滋さんがコーディネーターを務め、藤山さんをはじめ4人のパネリストが参加した。

「心豊かな家庭環境をつくる広島21」理事長の岸房康行さんは、子どもたちによる「食農体験」を通じて、感謝の心や道徳心が芽生えたと説明。農村宿泊体験や地産地消運動の事例を述べた。

元小学校校長の東佐都子さんは、農作物を



子どもたちが栽培し、収穫する取り組みについて報告。工夫や試行錯誤の過程で、成長が見られるようになったと話した。

食べ物が口に入るまでの経路を知らない子どもがいる現実を指摘したのは、日本農業新聞論説委員長の鈴木祐子さん。「命を学ぶ場」づくりの大切さを提唱した。

藤山さんは基調講演を踏まえて、伝統行事などが子育てに与える影響に言及。「地元は一人一人の生きた姿を記憶し、未来へつなげるところ」と、地域全体の環境整備の必要性を強調した。

全体を通じて、物の豊かさや効率だけを追い求めず、恵まれた自然や伝統をベースに、子ども自身の体験を重視する視点が大事、という主張が目立った。

(NPO法人こころ21会員)



パネルディスカッション

フォーラムを終えて

木時 寿子

日本は高度成長期の一極集中と付随した政策により、地方の衰退、核家族化、少子高齢化などが加速し、子どもたちを取り巻く環境は大きく変わり、身近な大人の数が増え、人の関わりが多様性が無くなっています。

今回基調講演では、目の前の利益を求め、流されてきたことによる問題点を教えていただきました。

パネリストの皆さまには事例により、視る・聴く・嗅ぐ・味わう・触る、この五感を使った体験で、本や映像では分からなかった事を知り、失敗も含め人は大きく成長することを教えていただきました。

皆さまのお話は、実体験であるからこそ、その景色が見えてきました。子どもたちも同じだと思います。大人の姿を見て子どもたちが育っていくことの大切さを改めて教えていただきました。

今、日本はIT後進国といわれその推進に力

を注ぎ、さまざまな場面で安心安全を求めすぎ、コロナ禍もあり、子どもたちが体験をすることができにくい社会となっています。

こうした中で私たちにできることは限られるかもしれませんが、今回のお話を心に留め、未来を担う子どもたちの育ちに生かしていきたいと思います。

(NPO法人こころ21理事)

開催要領

- ◆ 開催日時／令和4年11月12日(土) 午後1時～4時
- ◆ 場 所／合人社ウエンディひと・まちプラザ
北棟6階マルチメディアスタジオ
- ◆ 基調講演
持続可能な地域社会総合研究所 所長 藤山 浩氏
- ◆ パネルディスカッション
コーディネーター
・山城 滋氏(中国新聞社編集局特別編集委員)
パネリスト
・鈴木 祐子氏(日本農業新聞論説委員長)
・東 佐都子氏(元小学校校長)
・藤山 浩氏
・岸房 康行(心豊かな家庭環境をつくる広島21理事長)

第35回 こども夢コンサート

人魚姫と海のなかまたち

～探そう！海のたからもの～

こども夢コンサートは、平成25年2月からエリザベト音楽大学の協力を得て保育園・幼稚園・児童館などに出向き、子どもたちが生の音楽を身近に触れる機会をつくることを目的として実施してきました。コロナ禍のため中断した令和元年12月まで10年間にわたり34回開催しています。

新しい展開ができないかと模索していたところ、このたび同大学のご厚意によりセシリアホールをお借りし、感染対策を十分に施した上で、11月21日、流川こども園、広島女学院ゲーンズ幼稚園の園児など約180人を招き実施することができました。

作品は声楽専攻4年生の藤原 愛さんと糸賀里咲子さんが、子どもが楽しめる曲や音楽遊びを取り入れて書き上げた、子どものためのミニオペラです。指導・監修は折河宏治准教授（NPO 会員）、志賀あかりさん（卒業生）のお二人です。



舞台と観客席



全員写真

脚本・演出にあたっての苦勞、留意点など

藤原 愛 (声楽専攻 4年)

「子どもも大人も楽しめる作品にしたい」という思いから二つのことを主にこだわりました。

①脚本制作

子どもにさまざまな音楽を楽しんでもらうため、クラシックや子どもの間で流行っている曲や最近の子ども向けの番組などから曲を取り入れました。また、温かみのあるゆっくりした曲も加えることで、子どもたちが音色や歌詞に耳を傾け、いろいろな音楽に親しみを持てるようなきっかけになればという思いをこめました。さらに今回の物語に沿うよう、一部をオリジナルの歌詞にし、子どもたちが物語に入り込みやすくなるよう心掛けました。「勇気・希望・愛」など道徳的な部分を取り入れつつも、お堅い作品にならないよう所々に笑えるような部分を入れたいと考えていました。しかし想像以上に難しく、組み込むのに苦勞し、さらにそれを表現するということが大変だと実感しました。

糸賀 里咲子 (声楽専攻 4年)

脚本制作は、世界観やテーマを子どもから大人まで終始楽しめる 60 分になることを、常に心掛けました。ただ楽しむだけでなく、道徳的な内容で、説得力のある、筋の通った話になるような裏付けにもこだわりながら、制作しました。

私たちは普段、大学で既に完成されている作品を演奏する、「再現芸術」を主に学んでいます。そのため、何かを自分たちだけの知識で創り、それを大舞台で披露するということが初の試みであり、毎日が試行錯誤の連続でした。大学内での発表や公演ではなく、学外の方々からたくさんの支援をしていただきました。私たち自身も、一人の学生でありながら、一人の音楽家としての意識と責任感をより一

②世界観

海の中という非現実の世界を、子どもたちが想像を広げられるような空間作りにこだわりました。例えば、魚の動きに似せることや、手には手作りのヒレをつけて、魚らしさを表現することなどです。さらに舞台上にポンポンを飾るなど装飾を施し、音や音楽だけでなく視覚的にも海の中にいる感覚になるようこだわりました。また、作品全体の統一感をだすために、一つの曲を編成や雰囲気の変化や、転換時に流すなど何度か同じ曲をテーマ曲のように組み込みました。それにより、この作品の世界観をより強調できるのではないかと考えました。

多くの協力や支援のおかげで、私自身やこの公演に関わったすべての学生が普段の大学生活では味わえないたくさんの貴重な経験ができたと思います。学生を代表して心よりお礼申し上げます。

層もち、失敗や中途半端な完成度は決して許されないという、緊張感とプレッシャーを感じていました。

その中で特に苦勞した点の一つ挙げると、今回はかなり出演者の人数が多かったため、アンサンブルの場面も多く、その場面の演出の質を上げていく、という点です。この作品の中で一番時間をかけた場面は、アンサンブルが全員登場する、アンダー・ザ・シーでした。この場面は、踊りながら歌うといった、ミュージカルの一場面であり、声楽専攻の中には運動が苦手、ダンス未経験のキャストが多かったため、動きを揃えるのに時間がかかりました。

キャスト一人一人が努力をした結果、華やかな舞台にすることができたと感じています。

お二人ともエリザベト音楽大学大学院に進学される予定です。ご活躍をお祈りします。

◆ 藤原 愛さん 音楽学専攻 (音楽教育学) ◆ 糸賀 里咲子さん 声楽専攻

お礼のコメントをいただきました

昨日 (11月21日) はこども夢コンサートを鑑賞させていただきました。感動して涙を流す子や、家庭で「楽しかったよ!」と話す子、クラゲのまねをしたりしてコンサートごっこを楽しむ子など、それぞれにとっても楽しんでいたようでした。

保護者の方からも、「コロナ禍でコンサートに行けたことがなかったから貴重な体験をさせてもらってうれしいです」などの声があり、大好評でした。ほんとうにありがとうございました。

広島女学院ゲーンズ幼稚園 年中うさぎ組担任 白石恵史



園児を見送る出演者

カレーづくり大会から学ぶ!!

NPO法人こころ21 副理事長・事務局長 金子 敏郎

10年以上にわたって続けてきたカレーづくり大会もコロナ禍でなかなか人が集まること
ができず、2020年から中断せざるをえなくなった。

久々に、この活動の狙いなどを振り返り整理してみた。

大会にあたってつくった標語

- ◆ 大人は口を出さず手を出さず。
- ◆ 便利は人を育てない。
不便体験で「たくましい、利口な子ども」
を育てよう!

こうした標語を開催パンフレットで参加者へ伝えた。以下は「大芝学区大会」のパンフレットから。

大人は子どもの力を信じて、見守ってやってください。できるだけ、手伝い・口出しを抑えて!

カレー作りでは薪割りから飯ごうでご飯を炊くところからおこないます。上級生が下級生の面倒を見ながら、それぞれの役割を果たして完成させます。食事が終わったら自分たちが使った食器や道具をきれいに洗います。保護者の方々はできる限り手を出さないよう子どもたち主導をお願いします。

開催の危険度

実施にあたってはノコやオノ、包丁、火おこし
が関係する。どれも、ケガをする恐れはある。

昨今の子育てにあたっては、まず「アブナイ、
アブナイ」が先にあるのではないか。大人が責任
から逃れるために危険性のあることは何もさせな
いのは子どもは育たないと思う。

大きなケガをさせたくないなら、切り傷などの
小さなケガを体験するのもいいのではないだろう
か。もちろん、ケガがないに越したことはない。

この活動の評価

最初は2007年に舟入学区で実施。それを基点
に大芝学区、山本学区、そして、東広島市のアク



アフエスタという事業の中でも実施され活動の輪
が広がる。

2020年4月には広島市教育委員会より、「広島
市育成指導員 研修会」でカレーづくり大会の
狙いや実施方法の講義の依頼を受けて実施しよ
うとしていたが、コロナの影響で研修会が開催さ
れずその機会を失った。その後については、2022
年まで引き続きできない状況が続いている。

また、佐伯警察署管内補導協助手連絡協議会
からもカレーづくり大会を企画したいので協力を、
といわれながらコロナの影響でこれも実施する
ことができていない。

活動は中国新聞、日本農業新聞などの紙上でも
好意的に紹介されている。

今後の課題

活動に対する評価は高いが、丸太の手配、実
施するための機材の保管・運搬などについては
私たちの法人の力だけでは難しい状況となっ
ている。

今後はこの狙いが評価できるのであれば、行
政により「人間育成教育実習」として制度を確立
してほしいと考えるが、やっぱり無理だろう。だ
からこそNPO組織が頑張らなくてはならない。
若き仲間を求めたい。

広島信用金庫の地域社会貢献活動

広島信用金庫 相談役 坪井 宏
(NPO法人こころ21監事)

広島信用金庫では、地域の皆さまの快適で心豊かな暮らしづくりのお役に立ちたいとの願いを込めて地域貢献活動に取り組んでおります。

おかげさまで、春秋年二回開催する「日本画展」や日本を代表する能楽師をお招きして毎年秋に開催する「ひろしま平和能楽祭」、またスポーツ関連では「広島市ママさんバレーボール大会」や「広島市親善ゲートボール大会」など、皆さまのご協力を得て、多様な行事を長きにわたって実施させていただいてまいりました。

若い方たちに参加いただく行事としましては、古典芸能に気軽に親しんでもらいたいとの思いで高校生を対象にご招待しております「青少年のための能楽鑑賞教室」や県の西部地域の小学生の野球チームを対象とした「広島県西部少年野球広島信用金庫旗大会」（以下、「少年野球大会」）などがあります。

特に「少年野球大会」は、青少年の健全育成を目的として平成4年3月から継続開催しており、今年で31回目を迎え、これまでの参加チームは約1,100チーム、参加いただいた選手は約23,000人にもものぼります。少し自慢ですが、その中には、ソフトバンクホークスの柳田悠岐選手をはじめ、元テキサスレンジャーズの有原航平選手、広島東洋カープの中村奨成選手、当時は野球少年であった陸上短距離の山縣



亮太選手、最近で言えば元広島東洋カープの前田智徳氏のご子息である前田浩由選手と前田晃宏選手のご兄弟などがいらっしゃいます。

そして、特筆すべきは、当法人の岸房理事長のお孫さん吉田元選手（現東洋大学野球部）にも名を連ねていただいていることでしょうか。大きく巣立っていかれる背中を見るにつけ、サインをいただいおけばよかったと後悔する日々でもあります。

地域に根差したさまざまな取り組みの継続によってこうしたご縁が広がり、少しでも地域に貢献することができればこの上ない喜びとなります。

引き続き皆さまのご理解とご協力、よろしくお願いいたします。



NPO法人こころ21の活動を応援しています!!

医療法人社団
いでした内科神経内科
クリニック

葬儀・法要のご相談、ご用命は
株式会社 玉屋

ドローン空撮から印刷全般
株式会社 徒然社

街のフレンドリーバンク
広島信用金庫

おめでとうございます。

- ・秋の叙勲（11月3日発表） 瑞宝小綬章 黒川 浩明さん（元広島市収入役）
- ・高齢者叙勲（12月1日付） 下村 重円さん（元広島市議会 事務局長）

編集後記

今号の記事から-1

これまでの会報作成にあたっては、文章表現を「です、ます」調にしてきましたが、今回はたくさんの方から原稿をいただき書き方もさまざまでした。

今号の記事から-2

フォーラム開催で経験の大切さを、音プロで生の音楽体験を、カレーづくり大会は実施できないが体験についての記事が主体でした。原稿を通して、共通する部分は体験・経験ででした。

今の世の中、金の動きという要因が大きく注目され、欲求があればいかに満足させるか、その方法論を経済論的・経営者の利益的に探しているのでしょうか。例えば、食べ物の「出前」で考えてみます。今は「フードデリバリー」と言うらしい。例えばウーパールーパー、出前館、Uber Eatsなどなど。経済の動きで見ると、新しい業態が発生しお金の動きが大きくなり、GDPの拡大に貢献しているのでしょうか。（GDPが拡大すれば防衛費も増額になる）

さて、カレーづくり大会が終わって、子どもたちに「おいしかったか？」などと問えば、「自分で

今回は皆さんの勢いある、思いのある文章をそのまま掲載することにしました。

皆さまに執筆者の「思い」を感じていただければと思います。

（野坂 忠守）

作った分じゃけ、うまい」などと返事がよくあります。

ではどうして、自分の作ったものはおいしいと言うのでしょうか。それは、食べるまでの過程を自分でこなしているからに違いありません。

食事を出前で食べるのと自分で作って食べる、どちらがおいしいかということです。

ところが、出前でなんでも済むようになると、作る喜び、作り上げたという達成感など、人が喜ぶ要素をお金の動きに奪われてしまっているのではないのでしょうか。

やはり、家庭で食べる味は作る過程も体験してからのもの。それだからこそ、「おいしい」を感じるのかと思います。

「過程も家庭も大切です」（金子語録より）

（金子 敏郎）